



Title	ドライデンとポープ：翻訳詩の研究
Author(s)	高谷, 修
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33854">https://hdl.handle.net/11094/33854</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名 ( 高谷修 )

論文題名

ドライデンとポーブ —— 翻訳詩の研究 ——

## 論文内容の要旨

本論文は、ギリシア・ローマの古典文学の英訳を研究対象とし、イギリスの新古典主義時代の詩人であるジョン・ドライデンとアレクサンダー・ポーブがどのように西洋古典の作品を英訳したかという問題を考究している。ギリシア・ローマの詩人たちの中から、ホメロス、ウェルギリウス、またホラーティウス、オウィディウスの作品を取り上げ、原典がドライデンやポーブによって、いかに理解され、どのように翻訳/詩作されたか、また何故そのような英訳になったのか、そのような問題を解明することを目的としている。本論は「序章」、第1章「18世紀における古典の翻訳——ホラーティウスのオード (I, 5) を中心に——」、第2章「ドライデンのウェルギリウス翻訳——その政治性について——」、第3章「NisusとEuryalusの死——ドライデンのウェルギリウス翻訳の一面——」、第4章「ドライデンのホラーティウス翻訳——Epode, II の場合——」、第5章「ドライデンの「ポーシスとフリーモン」——“nor once look backward in your Flight”の意味を巡って——」、第6章「ヘクトールとアンドロマケの別れ——ドライデンとポーブの第6歌の英訳——」、第7章「プリアモスとアキレウスの対立と和解——『イーリアス』第24歌のポーブ訳を巡って——」、第8章「恋するポリフィーマス——アレクサンダー・ポーブのオウィディウス翻訳——」、第9章「直訳と諷刺——ホラーティウスのオード (III, 9) の「翻訳」について——」および「結論」の11の章から構成される。研究の方法は、全体を通して、まずギリシア語ラテン語の原典を分析し、次にドライデンやポーブの翻訳を取り上げ古典テキストと英訳を比較検討するというものである。ギリシア語やラテン語の原典全部に、また英詩にも、筆者自身による日本語訳が付けられている。

「序章」では、ギリシア・ローマ文学のイギリスにおける英訳の歴史を概観したのち、イギリスにおける古典語教育の実態を考察し、古典の翻訳に携わった文人たちがどのような古典語教育を受けたかを明らかにしている。また古典語の学習の発展にともなって彼らが次第に翻訳語としての英語の表現力に自信を持ち始めたことを指摘している。そして古典作家の中からホメロス、ウェルギリウス、またホラーティウス、オウィディウスを研究の対象として取り上げる理由を示し、翻訳詩の研究の主題と方法を示している。

第1章ではホラーティウスのオード (第1巻第5歌) の代表的な英訳を取りあげている。18世紀初頭になされたオラリ伯ジョン・ボイルの英訳に注目し、これをジョン・ミルトン (17世紀) やトマス・チャタトン (18世紀後半) による英訳と比較検討する。かつてマシュー・アーノルドはドライデンとポーブの時代を「散文と理性の時代」とよび低い評価を与えた。メイナード・マックはこれに反して、この時代をより積極的に評価しこの時代の文学思潮に新しい意味を見出す。二人の論を考察した上で、オラリ伯やモンタギュー夫人による英訳の検討を通して、この時代の文学趣味の変遷と豊穡さを論じホラーティウス翻訳の評価における慎重さの重要性を指摘している。

第2章ではドライデンが残したローマ詩人ウェルギリウスの『アエネーイス』の翻訳を取り上げている。ドライデンの『アエネーイス』翻訳については度々、翻訳の中にドライデンの政治的な偏向性が潜んでいることが指摘されてきた。ドライデンは1688年の名誉革命にともなって桂冠詩人と王室修史官の職を剥奪されたが、王ウィリアム3世の新体制に対する反感が翻訳の中に微妙に書き込まれているという見方が支配的であった。しかし、ドライデン翻訳は政治的偏向訳という一語をもって要約されるような作品ではなく、ドライデンの政治的な偏向性にも拘わらず、ドライデンが時代を超える普遍的な価値をもつ英訳を目指していたことを指摘する。

第3章は、ウェルギリウスの『アエネーイス』の中で語られるニーススとエウリュアルスのエピソードを取り上げる。原典の中では皇帝アウグストゥス体制下での政治的安定を求める詩人の切実な声が聞かれる一方で、ドライデンの翻訳において、翻訳者ドライデンはこのような詩人の声には反応していない。ドライデンの翻訳における関心は、寧ろ装飾過多ともいえる英語表現の方に、また英語を雄弁に駆使することの方に、より向けられていることを指摘し

ている。

第4章では、ホラーティウスのエポードの第2歌のドライデンの英訳を考察する。ベン・ジョンソンやリチャード・ファンショウ、またジョン・ボーモンなどの英訳を検討し、ドライデン翻訳をエポードのこのような英訳の歴史の中において比較検討する。そしてドライデンの翻訳が、それが翻訳された1680年代という固有の文化的・社会的・政治的な状況と密接な関係をもっていることを明らかにしている。

第5章は、オウィディウスの『変身物語』から「ボーシスとフィリーモン」のエピソードのドライデン翻訳を論じる。この英訳においては原詩にない「逃げる際に後ろを振り向くな」(nor once look backward in your Flight)という一行が加えられている。この詩行をダンテの『神曲』やキリスト教的な文脈の中で検討し、この一行が付加された理由はオウィディウスの異教世界をキリスト教世界に変質させるためであることを明らかにしている。

第6章は、ホメーロスの『イーリアス』第6巻のヘクトールとアンドロマケの別れの場面の、ドライデンとポーブによる英訳を比較検討する。ドライデンの翻訳における興味は原典を逐語訳することにはなく、寧ろ、登場人物をドライデンの気高い同時代人のように描くことにあったことを指摘している。またドライデンの後継者ともいえるポーブも、多少逐語訳的な傾向を保持しながらも、ドライデンと同じ趣向を引き継いでいることを指摘している。

第7章では、ホメーロスの『イーリアス』第24巻のポーブ訳を取り上げる。第24巻においてはプリアモスがアキレウスの許に我が子ヘクトールの遺骸を引き取りにゆくエピソードが語られる。ポーブはドライデンやウィリアム・コングリーヴといった先輩詩人たちが作り上げた英訳の伝統の中にあつて、ドライデン、コングリーヴ的英訳の詩法を更に洗練させたこと、また彼の翻訳詩法の背後には翻訳理論の発展があつたことを明らかにしている。

第8章は、オウィディウスの『変身物語』第13巻において語られるポリフィーマスのエピソードのポーブ訳を論じている。まずオウィディウスに先だつて、ギリシアのテオクリトスの描くポリフィーマス像を検討し、次にオウィディウスの描くポリフィーマス像を分析する。その後にはポーブのオウィディウスの英訳を検討している。そしてポーブ翻訳においては、オウィディウスとは異なつてポリフィーマス像が変質していること、つまり原詩とは異なりポリフィーマスが公正で精悍な若者として描かれていること、またその背後にはポーブの「牧歌」に対する思想が影響していることを明らかにしている。

第9章は、ホラーティウスのオード(第3巻第9歌)の様々な英訳を取り上げる。第3巻第9歌は諷刺的な色彩の強いオードであるが、原詩の諷刺的な色彩は、ベン・ジョンソンが試みたような逐語訳のような翻訳様式では表現されることが困難であること、また逐語訳よりも寧ろ、モンタギュー夫人がおこなつたような翻案という様式によって、諷刺的な意図がよりよく描かれる場合があることを指摘している。

「結論」においては、各章における論述をまとめた上で、17世紀から18世紀至る新古典主義の時代に行われた英訳の特質と意義を論じている。この時代を代表する詩人であるドライデンとポーブが生きていた時代は、英語という言語への意識や自負が高まつた時代であつた。彼らは時代の制約を受けながらも、英語の表現力を最大限に用いて最高の翻訳作品を残そうとした。例えば、ジョン・ドライデンのウェルギリウス翻訳についてみれば、もとより逐語訳は彼の目指すところではなかつた。この時期は政治的には不安定な時期であつたが、そのような「時代」の影響が彼の翻訳に反映している。翻訳の中に執筆当時のドライデンの個人的な事情や感懐、また当時の政治状況が巧みに書き込まれていることは注目に値する特質であるが、しかしこのような時代の影響を反映させながらも、ドライデン翻訳はそのような時代の桎梏を超えようともしている。その点に単なる翻訳を超える創造性を認めることができることを指摘している。

またアレクサンダー・ポーブはホメーロスの二つの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』を翻訳したが、彼の才能は「意訳」において最大限に発揮された。逐語訳的な表現の正確さはポーブが目指すところではなく、彼の関心は英語表現の彫琢にあり、内容の洗練にあつた。古代のギリシアやトロイアの人物や行動は、むしろ18世紀イギリスの人物や行動を思わせるものに変質している。そのように変質させた原因として、翻訳詩の伝統と時代の趣味の変遷が挙げられることを指摘している。

この時代のイギリスの詩人たちは、西洋古典文学の翻訳を通して、自国の文学や文化を向上発展させることを目指し、多様な翻訳活動を繰り広げた。また彼らの翻訳活動の背後には、活発な翻訳理論の探求があつた。翻訳と翻訳理論の研究は車の両輪のように、手を携えて発展し深化したことを指摘している。

以上の考察によって本論文は、主にイギリスの17世紀から18世紀にかけて活躍したジョン・ドライデンやアレクサンダー・ポーブの古典翻訳に注目し、ギリシア語ラテン語原典を分析したのち、ドライデンやポーブの英訳を比較検討し、彼らの翻訳の特質と意義を解明している。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 高 谷 修 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 服部 典之
	副 査 大阪大学 教授 片渕 悦久
	副 査 大阪大学 准教授 山田 雄三
<b>論文審査の結果の要旨</b>	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ドライデンとポープ —— 翻訳詩の研究 ——

学位申請者 高谷 修

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 服部 典之

副査 大阪大学教授 片渕 悦久

副査 大阪大学准教授 山田 雄三

【論文内容の要旨】

本論文は、序論、九章からなる本論、および結論と参考書目で構成された和文 354 頁、400 字詰め原稿用紙換算で約 780 枚に相当する論文である。ギリシア・ローマの古典文学の英訳を研究対象とし、イギリスの新古典主義時代の詩人であるジョン・ドライデンとアレクサンダー・ポープがどのように西洋古典の作品を英訳したかという問題を考究している。ギリシア・ローマの詩人たちの中から、ホメーロス、ウェルギリウス、またホラーティウス、オウィディウスの作品を取り上げ、原典がドライデンやポープによって、いかに理解され、どのように翻訳/詩作されたか、また何故そのような英訳になったのか、そのような問題を解明したものである。研究の方法は、全体を通して、まずギリシア語ラテン語の原典を分析し、次にドライデンやポープの翻訳を取り上げ古典テキストと英訳を比較検討するというものである。ギリシア語やラテン語の原典全部に、また英詩にも、論者自身による日本語訳が付けられている。

「序章」では、ギリシア・ローマ文学のイギリスにおける英訳の歴史を概観し、古典の翻訳に携わった文人たちがどのような古典語教育を受けたかを明らかにする。また彼らが次第に翻訳語としての英語の表現力に自信を持ち始めたとする。古典作家の中でも 4 人を研究の対象とする理由を示し、翻訳詩の研究の主題と方法を示す。第 1 章ではホラーティウスのオードの代表的な英訳を取りあげる。ジョン・ボイルの英訳に注目し、これをミルトンやチャタトンによる英訳と比較する。アーノルドはドライデンとポープの時代を「散文と理性の時代」とよび低い評価を与え、マックはこの時代をより積極的に評価し新しい意味を見出す。二人の論を考察した上で、この時代の文学趣味の変遷と豊穡さを論じホラーティウス翻訳の評価において慎重さが重要だとする。第 2 章ではドライデンが残したウェルギリウスの『アエネーイス』の翻訳を取り上げる。ドライデンの『アエネーイス』翻訳については度々、翻訳の中にドライデンの政治的な偏向性が潜んでいることが指摘されてきた。ドライデンは 1688 年の名誉革命にもなって桂冠詩人と王室修史官の職を剥奪されたが、王ウィリアム 3 世の新体制に対する反感が翻訳の中に微妙に書き込まれているという見方が支配的であった。しかし、ドライデン翻訳は政治的偏向訳という一語をもって要約されるような作品ではなく、ドライデンの政治的な偏向性にも拘わらず、ドライデンが時代を超える普遍的な価値をもつ英訳を目指していたことを指摘する。第 3 章は、ウェルギリウスの『アエネーイス』の中で語られるニーススとエウリュアルスのエピソードを取り上げる。原典の中では皇帝アウグス

トウス体制下での政治的安定を求める詩人の切実な声が聞かれる一方で、ドライデンの翻訳において、ドライデンはこのような詩人の声には反応しない。ドライデンの翻訳における関心は、むしろ装飾過多ともいえる英語表現と英語を雄弁に駆使することの方に、より向けられていることを指摘している。第4章では、ホラーティウスのエポードの第2歌のドライデンの英訳を考察する。ベン・ジョンソンやファンショウ、またポーモントなどの英訳を検討し、ドライデン翻訳をエポードのこのような英訳の歴史の中において比較検討する。そしてドライデンの翻訳が、それが翻訳された1680年代という固有の文化的・社会的・政治的な状況と密接な関係をもっていることを明らかにしている。第5章は、オウィディウスの『変身物語』から「ポーシスとフィリーモン」のエピソードのドライデン翻訳を論じる。この英訳においては原詩にない「逃げる際に後ろを振り向くな」という一行が加えられている。この詩行をダンテの『神曲』やキリスト教的な文脈の中で検討し、この一行が付加された理由はオウィディウスの異教世界をキリスト教世界に変質させるためであることを明らかにしている。第6章は、ホメロスの『イーリアス』第6巻のヘクトールとアンドロマケーの別れの場面の、ドライデンとポーブによる英訳を比較検討する。ドライデンの翻訳における興味は原典を逐語訳することにはなく、むしろ、登場人物をドライデンの気高い同時代人のように描くことにあったことを指摘している。第7章では、ホメロスの『イーリアス』第24巻のポーブ訳を取り上げる。第24巻においてはプリアモスがアキレウスの許に我が子ヘクトールの遺骸を引き取りにゆくエピソードが語られる。ポーブは英訳の伝統の中にあつて、ドライデン、コングリーヴの英訳の詩法を更に洗練させたこと、また彼の翻訳詩法の背後には翻訳理論の発展があつたことを明らかにしている。第8章は、オウィディウスの『変身物語』で語られるポリフィーマスのエピソードのポーブ訳を論じている。まずギリシアのテオクリトスの描くポリフィーマス像を検討し、次にオウィディウスの描くポリフィーマス像を分析する。その後にポーブのオウィディウスの英訳を検討している。そしてポーブ翻訳においては、原詩とは異なりポリフィーマスが公正で精悍な若者として描かれていること、またその背後にはポーブの「牧歌」に対する思想が影響していることを明らかにした。第9章は、ホラーティウスのオードの様々な英訳を取り上げる。第3巻第9歌は諷刺的な色彩の強いオードであるが、原詩の諷刺的な色彩は、ベン・ジョンソンが試みたような逐語訳のような翻訳様式では表現されることが困難であること、また逐語訳よりもむしろ、モンタギュ夫人がおこなったような翻案という様式によって、諷刺的な意図がよりよく描かれる場合があることを指摘している。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、古典の原典に17,18世紀のイギリス詩人が翻訳する際にどのような変更を加えたか、もしくはどのような差異が見られるかを、テキストの詳細な読みにより検討しながら探り、その意味を明らかにしたものである。テキストの丁寧かつ洞察に富んだ読みにより着実に論じる分析は、論者の誠実さを如実に語るもので、かつ極めて説得的である。また文献比較にとどまらず、本論は翻訳者であるイギリス詩人の訳を、当時のイギリス文学、および政治・文化的文脈の中に位置づけている。例えばドライデンのウェルギリウス翻訳についてみれば、彼は逐語訳をめざしたわけではないと指摘される。この時期は政治的には不安定で、そのような「時代」の影響が彼の翻訳に反映していて、執筆当時のドライデンの個人的な事情や感懐、また当時の政治状況が巧みに書き込まれるとする。だが時代の影響を反映させながらも、ドライデン翻訳にはそのような時代の桎梏を超え、単なる翻訳を超える創造性が認められる。先行研究では政治家のお抱え詩人として捉えられていなかったドライデン観への重要な変更を迫る点で、本論は高く評価される。ただ、本論文に問題がないわけではなく、古典詩とイギリス詩人のその翻訳の違いを指摘しながらも、その意味について分析が十分論じきれていない場合がある。しかし、その点は本論文の価値を損なうものではなく、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。